第５回　コラム集「こどもと共に育つ」

　コラム集「こどもと共に育つ」も第５回目となりました。こどものひろばで活動し、現在も子どもに関わっておられる方にそれぞれコラムを書いてもらっています。今号から筆者が一部変更され、小学校教諭、スクールソーシャルワーカー、社会福祉士、カウンセラー、介護福祉士という様々な立場の５名の方に、日常の出来事や子どもたちを取り巻く環境などそれぞれの目線でコラムを書いてもらっていますので、ぜひご覧ください。感想等もお待ちしております。

先日は、こどもフェスタに参加してきました。のびのびや学習会の同窓会でちょくちょく会うメンバーから退職依頼ぶりに会う方にもたくさん会うことができました。３年ぶりの再会のも関わらず「久しぶり～」とゆっくり話す暇もなく、「ここでこれしといて～」と言われて、バタバタ準備する感じは久々にひろばらしさを感じました。

のびのびの卒業生も少し顔を出してくれたり、卒業式ぶりに当時のサポーターが参加してたりと職員時代にフェスタで再会して「久しぶり～」「変わらんな～」みたいな話ができたらいいな～という密かな夢を持ちながら活動していましたが、その密かな夢の一部が叶った気がしました。何年経っても出会えば、活動していた当時のノリと雰囲気になってしまう感じは懐かしかったです。

コロナもひと段落（？）しているところで、コロナで実現しなかった「つだの送別会をしよ」という連絡もちらほら来て、京都に行くことが増えそうです。まだの方、お誘い待っております。笑（つだ）

こんにちは！Jr.キャンプ、のびのび、ころころと学生時代の１番の思い出は、こどものひろばのさとみんです。
ひろばと出会えたから、楽しい学生時代だったなぁと思いながら、コラムを担当させてもらうことになりました。
どうぞよろしくお願いします！

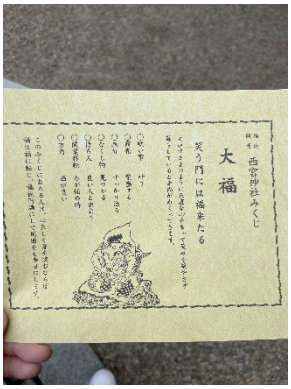
今は５歳の男の子のお母さんになりました。
毎朝１番かけている言葉が早く！急いで！だなと反省しながら、ギリギリに職場に辿り着き、高齢者のリハビリデイサービスで働いています。

最近、お母さん見て！亀みたいな石があるよ～。ここは顔みたいだよと教えてくれた石が、本当に私にも亀に見えました。
自分だけだと何気なく、あー大きな石があるなと思って通り過ぎてしまいそうな景色も、子の世界では面白いものがたくさんあるようです。
そんなものを一緒にいっぱい見たり、感じたりできるようにしていきたいな思います。

またまたコッペパンの時期がやってまいりました。元のびのび担当であり、スクールソーシャルワーカーもやめてしまったので、元 SSW となった T です！またこどものひろばにも週 1～2 回顔を出していますので見かけた際にはお声掛けください。
さてさて、今回の記事ですが、前回の記事で次回書ければ書こうと思いますと書いていた「壁に穴をあけるような子どもにどう対応するべきなのか（T ならこうする）」について書こうかなぁと思っています。

①子どもにとって心理的安心安全の環境をつくる

子どもが部屋やトイレに引きこもっているのはそこにしか安全を感じないからなのではないでしょうか？いつでもできていないことに注目し投げかけるのではなく、何気ない会話やできていることを探して投げかけること、「ここにいてもいいんだよ」というメッセージを発信し続けることで、子どもは「自分は受け入れられておりここに安心して居てもいいんだ。」と思えるようになるのではないかと思います。問題に向き合う前に前提として安心安全の環境・関係性があり、これが一番大切なことなのではないかと思います。その環境・関係性があった上で、その先の②本人の気持ちの確認③課題に対する現状と選択肢④その選択肢を本人が意思決定していくための伴走支援などにつながっていくのではないでしょうか。また、①～④通して本人のエネルギーを増やしてあげるような関わりも重要なのかなと思っています。また②～④に関しては次回書くかもしれません！ではまた！



こんにちは！7 年前まで山科青少年活動センター（やませい）の職員をしていた上原です。現在は、滋賀県の湖南市というところでスクールソーシャルワーカーとして働いています。湖南市は人口約 5 万 4000 人。中学校が 4 校、小学校が 9 校の小さな市ですが、私はそのうち 2 つの中学校区を担当しています。

湖南市で働くきっかけになったのは、6 年前、ある中学校が「大変な状況」だったからでした。非行問題に対応できるスクールソーシャルワーカーを探している、ということで声をかけていただきました。この中学校に初めて行ったとき、目に飛び込んできたのは、短ラン・ボンタン姿の 3 人の男の子たち。自転車で職員室前の廊下を走っていました。彼らには小部屋が与えられ、中にはお菓子のゴミやペットボトルが散乱し、窓を開けた下にはタバコの吸い殻が。私もすぐにトイレットペーパーで体をぐるぐる巻きにされ始めました。彼らが押し入ってこないよう、職員室のドアは常に鍵がかけられていました。先生たちは疲弊し切っていて、校長先生からの依頼は「とにかくあの 3 人に付いてもらえませんか」というものでした。一緒に来ていた教育委員会の担当者が「スクールソーシャルワーカーはそういう仕事ではないと思います」と異論を挟みましたが、私は OK しました。小部屋が与えられて、好き放題にやっているように見える彼らが、幸せには見えなかったからです。
学校に毎日来て、「いらんこと」ばっかりしているのに、彼らに構ってくれる人は誰もいません。京都市の青少年活動センターで働いていた 6 年間で、非行問題を抱える荒れる子どもの対応で最もやってはいけないのが「無視」であることを、私は経験的に知っていました。そして、この学校で支援すべき子どもが彼ら 3 人だけではないことを、次の訪問日で痛感することになりました。（つづく）

こんにちは、ぴーちゃんです。
先日、ひろばのこどもフェスタに参加しました～。久しぶりに"The ひろば"の空気感を存分すぎるくらいに感じることが出来ました。
さて、私は 4 月から本格的な社会人になりました。医療現場と福祉現場をかけもちし、日々邁進しております。

この前、福祉現場でとある出来事がありました。ある男の子が、1 階の窓から外に出ようとしたのです。私が「危ないよ、下りよう」と伝えると下りたのですが、しばらくすると再び窓から外に出て、入り口から入ってきました。私の本心としては怪我をしないか心配の気持ちがあります。ですが、咄嗟に出る言葉は注意・制止に近い言葉になってしまいます。日々反省です。
その子は、ダメな事だと分かっているけど大人の興味を引きつけるためにしたのかなと推測しています。
不器用な伝え方がその子らしいな～と感じるのですが、お互いが気持ちよくやり取りできるように支援を行うのがこちらの役割ではあるので、伝え方をもっと考えないといけないなと思いました。難しいですね。